

第1回家庭教育支援指導者等研修 実施レポート

日時：令和4年5月25日（水）10時～15時 参加者：65名（うち市町村等から35名）
会場：秋田県生涯学習センター講堂

今年度最初となる本研修では、「保護者の気持ちや指導の実際を知り、地域でチームで支えよう」というテーマのもとに研修を行いました。家庭教育支援の基本的態度及び支援体制等について学んだり、それぞれの立場でどのような目標をもって家庭教育支援に取り組んでいるのかをグループごとに協議したりしました。また、幼児期に必要な経験や小学校との接続等について学び、家庭教育支援チームの目指す姿に気付かされる研修となりました。

【午前の部 ①講話 ②協議】

秋田県生涯学習センター社会教育主事の **菊地 智** が「地域学校協働活動として支援する家庭教育支援チーム」と題して話をしました。家庭教育調査の結果から、保護者にとって「ネット等との付き合い方」に関する不安が増しているというデータ等を基にして、地域の力で家庭を支える家庭教育支援チームが必要とされていることを説明しました。また、各市町村での取組を紹介しながら、チームに期待される役割や支援体制、効果や方策等、支援のベースとなる事項について話をしました。結びに、コロナ禍をはじめとする社会の変化に対応するためには、保護者にとって身近な相談相手になれるよう、寄り添い届ける支援が大切であるとまとめました。



協議では、「公民館、学校、保健・福祉」の3つのグループに分かれて、「公民館、学校、保健・福祉との連携による家庭教育支援」を協議題として話し合いを行いました。今年度目標にすることや取り組む活動について発表し合うことで、互いの情報を交換できる場になりました。また、協議後半ではグループのメンバーを入れ替えて話し合ったことで、より多くの取組を知り、多くの人とつながる機会となったようです。

【午前の部 参加者アンケートより】（抜粋）

- ・家庭教育の現状や期待される役割、地域学校協働活動についてお聞きし、家庭教育支援チームの一員としてこれからも「キャッチする」「きく」「つなぐ」を大切に活動していきたいと思えます。
- ・公民館、学校、保健・福祉それぞれの立場から今後の展望を聞くことができとても参考になりました。行政の立場としてはどこも似たような悩み（周知・連携）を抱えていることが分かりました。

【午後の部 講話】

秋田大学教育文化学部 教授 **山名 裕子** 氏が、「幼児期に必要な経験と小学校への接続」と題して、講話をされました。はじめに、子どもの「発達」についての考えを話されました。「発達」は、結果として身につけていくことであって、本来結果でしかない「発達」を「目的」や「課題」として捉えてしまうと、子どもたちは「力を使って生きる」本来の姿を見失ってしまうことを説明されました。また、幼児期に必要な経験である「遊び」の大切さについては、実際に子どもたちが遊んでいる動画を視聴しました。子どもとのかかわりの中で行為の要求は「受け入れる」ことが難しくても自我の要求は「受け止め」、それに対する言葉かけができると述べ、それが子どもたちの安心感や信頼を得ることにつながると語りかけると、参加者は大きく頷いていました。最後に、子どもの「いま」を保証するために、大事なこととして、「ほめる」より「喜ぶ」ことを大切にしてほしいとまとめました。子どもの「味方」としての第3者の存在、養育者の「味方」としての第3者の存在を目指し、ゆったりとした時間や空間を保証するというお話は、家庭教育支援チームの目指す姿に大きな示唆を与えるものでした。



【午後の部 参加者アンケートより】（抜粋）

- ・今後家庭教育支援チームの一員として、親や保育者としてのかかわりでない「かかわり」ができるようになりたいと思えました。（先生のお話にあった「教育的でない大人」になりたいです。）
- ・自分自身が子育ての最中では全く余裕がなかったが、今周囲の子どもたちや孫を見ているとおもしろがって見ていられるのは確かだと感じ、その余裕を地域で活かせるはずと感じました。